

東青地区統合校開設準備委員会（第1回）概要

日時：令和7年5月22日（木）

13:30～15:30

場所：県立青森西高等学校 会議室

<出席者>

○委員

岡 一仁 委員、岩井 友之 委員、竹内 芳 委員、倉内 由理子 委員、
八木橋 敏晃 委員、高田 万里子 委員、對馬 牧子 委員、山内 栄隆 委員、
常田 清彦 委員、工藤 裕司 委員、前田 済 委員、櫛引 素夫 委員、
高谷 直徳 委員、加藤 文子 委員、今別 幸司 委員、白鳥 里恵 委員

○オブザーバー

県立青森西高等学校

山内 拓雄 教頭、山崎 宏美 事務長、千葉 哲也 教務主任

県立浪岡高等学校

野呂 和也 教頭、成田 美幸 事務長、高橋 朋己 教務主任

1 開会

2 辞令・委嘱状交付

■ 県教育委員会から各委員へ辞令又は委嘱状が交付された。

3 東青地区統合校開設準備委員会設置要綱説明

■ 事務局が資料2により設置要綱の概要について説明した。

4 委員長及び副委員長選出

■ 委員長に前田 済 委員、副委員長に岡 一仁 委員及び岩井 友之 委員が選出された。

5 事務局説明

（1）青森県立高等学校教育改革推進計画第2期実施計画

■ 事務局が資料3により第2期実施計画の概要について説明した。

（2）東青地区統合校の設置に向けた検討の進め方

■ 事務局が資料4により検討の進め方について説明した。

■ 委員長から次のような発言があり、委員から了解された。

○統合校の校名等については本委員会で決定するのではなく、本委員会の意見を報告書として取りまとめ、それを基に県教育委員会等において検討し、決定することとする。

6 学校紹介

■ 委員長が統合対象校の校長である岡副委員長及び岩井副委員長に対し、それぞれの学校の状況について説明を求めた。

○青森西高校（岡 一仁 副委員長）

本校は、昭和38年4月1日に全日制普通科女子高校として開校し、今年で63年目を迎える。開校当初は1学年550名と大規模校であり、卒業生は21,777名を数え、女優の木野花さんや、ねぶた師史上初の女性ねぶた師である北村麻子さんなど、多くの卒業生が様々な分野で活躍されている。

平成5年に人文学科の設置を契機に男女共学となり、平成23年度末に人文学科が閉科し、平成24年度からは普通科のみとなっている。

校訓は「和」、教育目標は「自主、創造、協調」である。令和6年6月現在、普通科6クラス、全校生徒696名であり、全体の約6割が女子生徒である。生徒像としては、心穏やかな素直な生徒ばかりである。

進路は、国公立大学、短期大学、専門学校、公務員就職、民間就職と多岐にわたっている。近年は進学希望者が多く、令和6年度は86.8%と9割近い生徒が進学し、そのうち国公立大学への進学は30名である。

本校は、部活動が活発である。運動部、文化部、また「青西おもてなし隊」を含む特別活動における加入率は72%となっている。運動部では、昨年度、女子バレーボール部が県高校総体6大会連続19回目の優勝を果たし、そのほかソフトボール部、剣道部、ボート部が上位に入賞を果たしている。

そのほかの特色ある教育活動は、「青西おもてなし隊」をはじめとするボランティア活動である。「青西おもてなし隊」は、青森を訪れる観光客へのおもてなしを中心に活動する有志のボランティア団体である。具体的な活動としては、大型クルーズ船で青森を訪れた観光客に手づくりのお土産を手渡す活動、石江江渡下町会のねぶたの製作から運行までの手伝い、三内丸山縄文祭りの手伝い、JR東日本と三内丸山遺跡センターが連携して実施しているイベントや、青森の歴史にスポットを当てたコースを案内するハイキングの企画・運営などがある。その他のボランティア活動として、あおもり桜マラソンや保育園のイベントの手伝いのほか、華道部が定期的に新青森駅構内に花を生け、おもてなしを行っている。昨年度、これらの校外活動には、延べ44回、約460名の生徒が参加した。また、この活動は、青森大学との高大連携において、櫛引委員長が中心となり、「はっしん！新青森」という広報紙において取り上げ、情報発信をしてもらっている。さらに、これらのボランティア活動は、今年度から

学校設定教科として県に申請し、単位として認定することとしている。

本校のスクール・ミッションは、生徒一人一人の興味・関心に応じた教育活動を通して個性の伸長を図ること、地域に根差した活動や部活動において切磋琢磨することを通して何事にも果敢に挑戦する心や他者を思いやる心を育てること、創造性と協調性を養うこと、これらの資質・能力を育成することで、社会の発展に寄与する人財を育成することである。

このミッションを果たすに当たっては、学校関係者のみでは大変困難であり、昨年度から学校運営協議会を学校内に組織し、地域が持つ教育資源を大いに活用しながら、多くの方々の支援をいただいて教育活動を推進している。このことから、学校運営協議会の熟議を経て、承認となったものを学校経営方針として掲げている。

本校としては、引き続き地域の皆様の支援をいただきながら、生徒一人一人の進路実現とこれからの社会に貢献できる人財の育成に向け、教育活動を推進したいと考えている。

○浪岡高校（岩井 友之 副委員長）

本校は、昭和5年に青森県浪岡村立浪岡女子実務学校として設立され、昭和23年に青森県浪岡町立浪岡高等学校、そして昭和30年に青森県立浪岡高等学校となった。以来、学級数の増減と学科やコースの設置・廃止等を経て、現在は各学年1学級の小規模校として活動している。昭和50年代には全校生徒が1,000名を超えていた時期もあったが、今年度の在校生は60名となっている。今まで多くの卒業生の活動の歴史と伝統に支えられ、校訓である「誠実、勤勉、友愛」の下、今年度創立95周年を迎える。

生徒に対しては、基礎学力の定着に重点を置いて教育活動を行っている。また、教養コースと商業実務コースに分かれ、多様な進路志望の達成に向けて様々な取組を行っている。

本校は、浪岡地区の高校として地域の皆様に支えられて多くの教育活動を展開している。平成2年から継続している空き缶壁画は、今年度で36回目となる。毎年地域の風物詩として注目され、これまで、アルミ缶リサイクル協会賞、3R推進協議会会長賞、日教弘教育賞奨励賞、もったいない・あおり賞を受賞するなど、輝かしい活動実績を残している。今年度も生徒数は減ったが、昨年度と同規模の壁画をつくろうと頑張っている。

こうした活動以外にも、部活動において近年バドミントン部が全国大会で輝かしい実績を残している。オリンピックに出場した奈良岡功大選手を輩出しているほか、昨年度はインターハイで個人第3位に入賞している生徒もいる。そのほか、生徒会、JRC部を中心としたボランティア活動も盛んで、地域社会と連携し、地域の中の高校として、地域と強い結びつきを大切にしながら様々な活動を展開している。

今年度においても、生徒の自己実現と進路目標達成のために、保護者、地域住民、同窓生の皆様と連携・協力し、地域の発展に寄与する人財の育成を目指して、地域に信頼される開かれた学校づくりを推進している。

7 意見交換

(1) 統合校の目指す人財像・学校像について

■ 事務局が資料3により、統合校が目指す姿として「生徒の個性や能力を伸ばし、大学等への進学や就職等、生徒一人一人の幅広い進路志望の実現に寄与する高校」、「地域と連携・協働した探究的な学びを通して、生徒の地域社会の発展に貢献する意識を醸成する高校」を基本とする旨を説明した。

■ 委員長が各委員に対し、統合校の目指す人財像・学校像について意見を求めたところ、次のような意見があった。

- 両校とも地域に貢献できる生徒を育成している。地域のことを知れば、グローバルな感覚も育成できるため、地域密着型の教育を行う学校であってほしい。
両校とも地域と密着した活動を行っていることから、統合に当たっては、浪岡地区を含めた地域と密着した活動が必要である。
- 浪岡地区にサテライトの機能や施設を配置するなど、浪岡地区と統合校に通う生徒とのつながりを維持していくことが大切である。
- 両校とも歴史があり、それぞれの歴史を生かしながら次へ進めていければよい。
- 統合校の校舎として現在の青森西高校を使用する方針なので、交通費支援やバスの運行など、生徒が両地区で活動しやすい環境づくりをすることも大事である。
- 浪岡地区を含めた青森市内の西地区を1つの教育資源と捉えており、学校運営協議会の幅や生徒の活動する場所が広がり、浪岡の歴史を学べる場が増えるなど、教育活動にも学校経営方針としても地域とのつながりは必要である。
- 両校とも地域活動への参加を活発に行っており、地域とのコミュニケーションは生徒の重要な学びの場、生きる力の育成につながっている。学力をつけるというのは一番の基礎ではあるが、部活動や地域との交流など、様々な意欲を持つ生徒が入りたいと思えるようなカリキュラムや環境を整えられるとよい。
- 人と直接関わることにより、コミュニケーション能力や広い視野を持った人財を育成できる。多様な人たちとの関わりにより、多様なものに対する興味を深めていくことができる。
- 中学校と高校の連携を強めることが大切である。

- 学校が抱える課題を学校だけで解決することは難しいので、統合校でも学校運営協議会を取り入れてほしい。
- 浪岡地区で小学生が参加するイベントを運営しているが、ボランティアとして高校生や中学生が120名程度集まる。高校生の活動を小・中学生が見て、いずれは自分もボランティアとして参加したいと考えるなど、地域とのつながりが続いている。統合校の生徒にもボランティアとして参加してもらって、地域の活性化につなげてほしい。
- 生徒は自分の将来を考えて高校を選択するので、多様な主体と関わることで関係性が広がる高校、多様な進路希望に対応できる高校であってほしい。
- 学校案内には多様な部活動が掲載されているので、中学生にとっては、統合校へ進学すれば選択肢が増えるというメリットが考えられる。
- 学校像について、浪岡高校や青森西高校の卒業生が母校だと感じられる学校にしてもらいたい。社会において、出身校のつながりから応援されることがあり、それが生徒のメリットにつながるとともに、同窓生の生きていく糧にもなる。
- 卒業後に、統合校の卒業生であることを誇れる高校にしていきたい。
- 委員長が、本日の意見を踏まえつつ、県教育委員会及び開設準備室において更なる検討を進めるよう指示した。

(2) 校名案の決定方法について

- 事務局が資料5により、想定される決定方法のイメージとしてA案（事前公募方式）及びB案（事後意見照会方式）を提示し、説明した。
- 委員長が各委員に対し、校名案の決定方法について意見を求めたところ、次のような意見があった。
- 校名を公募して、その公募で出てきた候補を開設準備委員会で何点かに絞り、それをさらに生徒に照会するというような方法はどうか。両校の生徒や中学生など、公募先は今後考えていけばよい。
- 市内の全中学生に公募をかけてはどうか。そこから興味を持ち、統合校を受検する意欲が湧けばよい。
- 市内の全中学生に案を出してもらい、それを開設準備委員会で絞り込むというのは妙案である。

- 生徒だけでなく、大人も含める必要がある。
- 公募する場合のスケジュールは現段階でイメージできるか。
→（事務局）公募の方法や対象など、県立高校であることなどを踏まえて議論していただき、校名の決定方法を決めていただければ、それに合わせたスケジュール案を提示したい。
- これまでの統合校の事例はどうか。
→（事務局）これまでの事例では、開設準備委員会において校名案候補を複数出した上で意見照会を行い、寄せられた意見を踏まえて開設準備委員会において協議するB案であった。
- A案で行う場合、今の生徒はインターネットに強いので、Googleフォーム等で募集すれば対象者を絞れる。
- 中学校に募集をかけるのがよい。
- 先行事例が全てB案なのであれば、B案でよいと思う。ただ、協議のスタートはあくまで開設準備委員会としながら、協議するための案を市内の中学生から出してもらうというのはどうか。
- 中学校長会や青森市教育委員会の協力が得られるのであれば、開設準備委員会の意見として、中学校と相談して中学生に募集をかけ、案をつくるというようなステップはあり得る。
- 東青地区の統合校なので、東青地区の中学生に案を出してもらい、そこから開設準備委員会で協議するというのはあり得る。
- これから高校に入ってくるこどもたちというのは理解できるが、両校の卒業生も多く、それぞれの思いもあることから、生徒以外からも募るべき。
- 同窓会として同窓生に意見を募り、一方で中学生にも募集するのはどうか。
- 委員長が、これまでの協議を踏まえ、校名案を公募し、その後、開設準備委員会で絞り込むというのが大勢であると確認した上で、各委員に対し、公募の対象、手段、日程について意見を求めたところ、次のような意見があった。
- これまでの協議では、対象は生徒、学校関係者、同窓生の少なくとも3つであり、それぞれ分母も違うことから手法もそれぞれであり、スケジュールとの兼ね合いで具体的に実行可能か考える必要がある。

- 次回の開設準備委員会までに検討する時間的な余裕はあるか。
- （事務局）公募の方法や対象などについて、本委員会の協議を踏まえた公募実施案を次回に示すことは可能である。ただ、公募対象などが定まっていなければ提案が難しいので、ある程度は決めていただきたい。
- 委員から校名案を提案するのではなく、生徒も含めて広く募集するという方向性はどうか。どのような範囲が考えられるか。
- 同窓生と東青地区の中学生に募集する。
- 同窓生から募集すると、経費や時間がかかる。そう考えると、あまり年齢が高い世代にまでというのはどうかとを感じる。
- このような統合に向けた会議が始まっているということを新聞で紹介してもらい、生徒にはアンケートを取り、同窓生に対しては応募フォームの情報を載せてもらうというのはどうか。
- 7月中旬開催予定の第2回開設準備委員会で、どこまで絞り込む必要があるか。
- （事務局）B案であれば、次回に各委員から校名案を提示してもらうというスケジュールである。A案であれば、公募方針を次回に決めるので、時間的な余裕はある。今回の会議では方向性を決めてもらいたい。
- 浪岡高校の同窓会は、役員からの思いを聞くことができれば大丈夫である。
- A案により、教育委員会のホームページ等で募集するのであれば、同窓生でも興味がある方は応募すると思うので、そういう方の意見を拾うだけでも十分だと思う。
- 在校生を対象に入れてもよいと思う。
- 委員長が、これまでの協議を踏まえ、公募対象は同窓生、東青地区の中学生、両校の在校生、ホームページ等を使った一般の方の4種類であると確認した。引き続き、委員から次のような意見があった。
- 全戸に配布される県教育委員会の広報紙に、公募について掲載すればよい。
- インターネットで見られると言っても、見るか見ないかは各自の選択であり、どの手段でも一緒だと思う。
- 校名案の公募についてSNSで発信してはどうか。

- 中学生に対しては教育現場の中で募集のための手段を講じることができるが、全ての同窓生に伝えることは難しく、そこまでは求めなくてよいと思う。ただ、同窓生を無視するわけにはいかない。
- 一番広く県民に届くと期待されるのは、やはり県が管理する媒体や広報紙だという話は出ているが、技術的、組織的に可能かどうかは検討が必要である。
→（事務局）広報の方法について、県の媒体を使うという意見があったが、A案でも、県のホームページなどを使いながら公募という方法が取れると想定しており、意見を聞く対象や、同窓会総会が開催されることなども踏まえながら、スケジュール案をつくりたい。公募方法や対象について、もう少し明確になるよう議論してもらえれば、それを持ち帰って検討したい。
- A案、B案でいけば、A案寄りということで公募する。両校の在校生に対しては容易にできる。同窓生についても同窓会で聞き取ることができる。一般の方へは、広報を使って可能ということか。
→（事務局）県の媒体などで公募できる。
- 東青地区の中学生については、どのような公募の方法が想定されるか。
- 東青地区の中学生への公募については、校長会で話をして検討していくことが考えられる。
- 多くの応募があると思われる。これを数の論理で決めるのではなく、協議で決めていく必要があることから、1回の会議では難しいと感じる。
- 公募に当たって一定の命名規約などは設けるのか。それとも、特に制約なく自由に公募するのか。
- 中学生や高校生、同窓生は、学校や同窓会など、それぞれのシステムの中で責任を持って応募してもらえと思うが、一般の方については様々な案の応募があると思う。
- 例えば青森西高校や浪岡高校に関係のある、その地域の方へと分かるようにできないものか。
- 興味がある方は、見れば必ず行動する。きちんと考える人は変な校名案を出してこないと思う。
- 事務局が、対象別に公募の方法を分けるかどうか、各委員からの校名案の提案をどうするか、という点について委員長に確認した。引き続き、委員から次のような意見があった。

- 応募フォームに属性の選択肢をつけておくと、多少は抑止力となる。
- 一般公募すると膨大な応募数になると思うが、学校名なので最終的には常識的な名前になると思われ、そこまで広く公募する必要はないと思う。同窓生、在校生、中学生の意見で十分ではないか。
- 同窓会とすれば、総会で代表して意見をまとめることも可能である。
- 委員長が、これまでの協議を踏まえ、両校の在校生は学校で、東青地区の中学生は中学校で、同窓生は両校の同窓会で、それぞれ意見を募って原案をつくと確認した。引き続き、委員から次のような意見があった。
- B案にある意見照会というのはどのような方法を想定しているのか。
→（事務局）これまでの例では、各委員に1案ずつ提案してもらった校名案候補について第2回開設準備委員会で確認してもらった後、第2回と第3回の間の約1か月、県教育委員会のホームページで意見を広く求め、第3回開設準備委員会において県教育委員会に報告する校名案を協議してもらっている。
- B案の意見照会が、A案の一般公募に代わる形か。
→（事務局）広く意見を伺うという意味で意見照会を考えていた。在校生、中学生、同窓生だけであれば、その方々の意見を伺うということになるが、委員も校名案を提案するとなれば、タイミングによってはその案については広く意見を伺うことができなくなる。
- 委員の皆さんも、どの方向性がよいのか悩んでいるだろう。この場で1つの形に決めるのではなく、後日、事務局に各委員が意見を提出し、次回、具体的な決定方法を改めて検討するというのはいかがか。校名は、両校ともそれぞれ思いがあるので、少し時間をかけたい。
- 委員長が各委員に対し、校名案の決定方法についての意見を意見等記入票に記載して事務局に提出するよう依頼し、事務局に対し、各委員の意見をまとめて次回の開設準備委員会で資料として提示するよう指示した。

（3）制服の方向性について

- 事務局が資料6により制服の方向性に係る論点等について説明した。
- 委員長が各委員に対し、制服の方向性について意見を求めたところ、次のような意見があった。
- この機会なので、新たにつくったほうがよい。学校の雰囲気には制服も大事な要素であるので、新たな制服のほうがよい。

- 新しく制服をつくるほうがよい。
- スカートではなく、スラックスを希望する生徒もいることから、スラックスに合うデザインがよい。
- スカートだけでなく、スラックスを選択できる制服がよい。
- 青森西高校はブレザーなので、女子生徒用のスラックスもあり、既に複数名対応している。新制服を検討するにしても、生徒の意見が反映されないものが出来上がってしまうような検討期間の短さである。本来であれば当面は青森西高校の制服を使用し、数年後に生徒の意見を反映させながらゆっくり検討してもよいと思うが、非常に悩んでいる。ただ、先ほどからの意見としては、新制服が生徒募集に当たっても1つの起爆剤になるということだったので、新制服を作成する方向で動くものの、非常にスケジュールがタイトであり、学校側の業務が増えることが予想される。そういう意味で、新たにデザインを作成して令和9年度から使用するとなれば、両校の教頭や制服を担当する生徒指導部の主任を含め、早い段階で進められる体制づくりをお願いしたい。
- 前任校で制服検討委員会を経験したが、結果として、同窓生の望まないようなデザインになったので、デザインの検討が非常に難しい。様々検討して、生徒にアンケートを取ったときに、同窓生が望まない結果になることがあり、なかなか難しいと思った。業者は、きちんと考えられたデザインを用意してくれるので、それを選んだほうが無難だったというのが前任校での感想である。
- 検討するより、デザインを業者からあらかじめ提示してもらったほうがある程度余裕があるということか。そのデザインは、ワンセットで見る感じになるのか。
- そうである。デザインに対して、少し変えてほしいなどと要望し始めると泥沼にはまっていく。生徒に意見を求めるにしても、全校生徒など、ある程度の数の生徒、場合によっては同窓生にも聞いたほうがよい。
- 業者はプロなので、今の時代に合ったデザインや機能性になっているはずである。業者のデザインを修正するというのは難しいと思うが、色などは、在校生の意見を聞き取っておいたほうがよい。また、価格も含めて検討していただきたい。
- 委員長が統合対象校の教職員等からなる作業部会において、新たな制服の作成に係る業務を進めてもらう旨を確認し、委員から了解された。

(4) その他

- 委員から次のような意見があった。

- 大人同士だけでなく、生徒と直接話をする事で、実のある協議となると考えるため、開設準備委員会設置期間中に生徒の意見を聞く機会が必要ではないか。
- 生徒は言いたいことを言うが、その中には柔軟な発想もあるので、生徒の意見を聞く場面が必要である。
- 両校の文化祭を、それぞれの学校関係者が訪問し合うなど、両校の連携は今年度から始められる。
- 今後、様々な地域で活動していくには、PTAの協力が一層重要になる。PTAとしても、両校で交流しながら協力体制をつくっていくことが、生徒の活動の選択肢を広げることにつながる。
- 開設準備委員会の範囲だけで物事を進めていくのではなく、この開設準備委員会で協議している内容を県の媒体を使ってお知らせできないものか。
→（事務局）配布資料は県教育委員会のホームページに掲載する予定であり、議事録も、委員の確認を経た後で、同ページに掲載する予定である。また、校名の検討の際に話題に上がった、様々な媒体による広報については、方向性が定まったタイミングと広報にかけられるタイミングがうまく合えば、活用について検討していきたい。
- 議事録は誰も見たいと思わないため、分かりやすくニューズペーパー的にまとめたものをつくるという考えはないか。中学生等にも配布できる。
→（事務局）開設準備委員会の議論の過程などを、生徒、保護者、地域の方に周知するという事だと思うが、作成が可能かどうかも含めて、検討させていただきたい。

8 閉会

9 青森西高校施設見学